

日本文学作品

— 鷗 外 —

45期生

I テーマ設定の理由

今までいろいろな文学作品を読んできたが、あまり馴染み深くないのが「森鷗外」の作品である。そこで、鷗外の作品について調べ、親しもうと思った。

II 研究方法

- (1) 鷗外自身について調べる。
- (2) 鷗外の作品をたくさん読み、内容を理解する。
- (3) 作品の特徴を調べる。
- (4) 東京都文京区立鷗外記念本郷図書館に行き、館長さんの話を聞いたり、資料を見たり、集めたりする。
- (5) ラジオ講座（鷗外評論家、吉野俊彦氏による解説）を聴く。

III 研究内容

・人の書いた作品を深く読み、考えたり、その人となり調べたりしていく上で必要となるのは、その人の年譜である。生い立ちを追って見られる、という理由だけではない。その人が生きた時代背景を知ることによって、その人について深く理解することができるからである。

というわけで、まず、森鷗外の年譜を書いてみよう。

年代	*年齢	森 鷗外 略年譜 事 項	一 般 事 項
1862 (文久2)	1歳	1月19日、島根県鹿足郡津和野町に生まれる。本名林太郎、代々典医。	1月 坂下門外の変 8月 生麦事件
1872 (明治5)	11歳	父に従って上京し、西周邸に寄寓し進文学社に入りドイツ語を学ぶ。	9月 新橋・横浜間に鉄道が開通する。
1874 (" 7)	13歳	東京医学校予科入学。	
1877 (" 10)	16歳	東京大学医学部の本科生となる。	2月 西南戦争
1881 (" 14)	20歳	東京大学医学部卒業。	10月 自由党結成される。
1884 (" 17)	23歳	ドイツ留学。	
1888 (" 21)	27歳	ドイツより帰朝。	
1889 (" 22)	28歳	赤松登志子と結婚する。	大日本帝国憲法公布。
1890 (" 23)	29歳	1月「舞姫」発表。 8月「うたかたの記」発表。 長男出生。登志子と離婚。	

1891 (明治24)	30歳	1月「文づかひ」発表。 8月、医学博士となる。	
1894 (" 27)	33歳	日清戦争で出征する。	日清戦争。
1902 (" 35)	41歳	1月、荒木志げと結婚。	
1904 (" 37)	43歳	日露戦争で出征する。	日露戦争。
1909 (" 42)	48歳	「スバル」創刊。	
1910 (" 43)	49歳	「青年」を「スバル」に連載。 7月、文学博士となる。	
1912 (" 45) (大正元)	51歳	「興津彌五右衛門の遺書」を「中央公論」に発表。	7月 明治天皇没す。 乃木大将夫妻、殉死。
1915 (" 4)	54歳	「山椒太夫」発表。	
1916 (" 5)	55歳	1月「高瀬舟」「寒山拾得」発表。 「澁江抽齋」「伊澤蘭軒」新聞連載。	
1922 (" 11)	61歳	7月9日死去。	

※この年譜での「年齢」は、数え年。満年齢で数えて「享年60歳」とする年譜も多い。

では、早速、作品について読み取っていきましょう。

1. 『雁』について

『雁』は、明治44年9月から大正2年5月まで、雑誌『スバル』に連載された小説である。割合長い文章で、「鷗外の文章の特色がよく表れている。」と批評にあったので、これについて深く調べていくことにした。登場人物は、僕、岡田、お玉である。

①僕

小説の最後の部分に、こんなことが書かれている。

僕にお玉の情人になる要約の備わっていぬことは論を煩^まためから、読者は無用の臆測をせぬが好い。

「僕にお玉の情人になる要約の備わっていぬこと」というのは、一体、何を意味しているのだろうか。

岡田とお玉のすれ違いの情景における「僕」の心理描写を見たい。

僕の胸の中では、種々の感情が戦っていた。この感情には、自分を岡田の位置に置きたいということが根柢をなしている。しかし僕の意識は、それを認識することを嫌っている。僕は心の中で、「なに、己がそんな卑怯な男なものか。」と叫んで、それを打ち消そうとしている。そしてこの抑制が功を奏さぬのを僕は憤っている。自分を岡田の位置に置きたいというのは、彼女の誘惑に身を任せたいと思うのではない。

「僕」は「お玉の情人になる要約が備わっていぬ」のではあるが、「お玉」への関心

は並み並みならぬものなのである。つまり「僕」は、一種のくすんだ青春の哀愁を描く『雁』の、「潜在的な主人公」にほかならない。

それでは、「お玉の情人になる要約が備わっていた」であろう「岡田」とは、一体何なのだろうか。

②岡田

まず、岡田についての描写を本文中から見てみたい。

血色がよくて、体格ががっしりしていた。

当時、岡田程均衡を保った書生生活をしている男は少なからう。

遊ぶ時間は極めて遊ぶ。夕食後に必ず散歩に出て、十時前には間違いなく帰る。

壁隣の部屋に主人のいる時刻と、留守になっている時刻とが狂わない。誰でも時計を号砲に合わせることを忘れた時には岡田の部屋に問いに行く。上条（下宿屋）の帳場の時計も折々岡田の懐中時計によって匡されるのである。

周囲の人の心には、久しくこの男の行動を見ていればいる程、あれは信頼すべき男だという感じが強くなる。

岡田とは、「僕」が「潜在的な主人公」として生きている世界の、見せかけだけの主人公である。彼についての描写を見ていくと、彼が、下宿屋上条の「標準的下宿人」しかもエリートであることがうかがわれる。

そんな岡田に、「お玉」は惹かれてゆく。岡田もお玉に惹かれてゆく。

ところで、岡田にとって「女」とはどんなものなのだろうか。

死の天使を^{しん}の外の待たせて置いて、徐々に脂粉の粧を凝らすというような美しさを性命にしている女が、どんなにか岡田の同情を動かしたであろう。

女というものは、岡田のためには、只美しい物、愛すべきものであって、どんな境遇にも安んじて、その美しさ、愛らしさを護持していなくてはならぬように感ぜられた。

話を読み進めていくと、「お玉」は確かに「岡田にとっての女」である。

しかし――

③岡田とお玉の結末

「式拾式」章から、お玉の運命は決まった。

下宿屋上条の夕食に「僕」の嫌いな青魚（さば）の味噌煮が出たばかりに、「僕」は隣室の岡田を散歩に誘い出し、折から準備万端ととのえて、岡田を待っていたお玉の妨害をするのである。しかも、石原という水滸伝的人物も入ってきて、お玉の運命を象徴する雁を殺して酒の肴として喰い荒らしてしまう、という惨劇が待ち構えているのだ。

岡田がお玉の誘いに乗っていけなかったのは、どんな理由によるか。それは、岡田

の存在するエリート社会と、お玉の庶民の社会との論理が、かけはなれすぎたためのだろう。

岡田の追う夢は、お玉の求める救済の願いに重ならなかった。近代日本の青春の歪み——これが、この『雁』の惨劇を生み出したのであろう。

2. 『舞姫』について

①近代日本文学の代表作

『舞姫』が、近代日本文学の代表作であるといわれるのは、何故であろうか。

それは、近代的自我に目覚め、真にエリスを愛しながら、それにも拘わらず、近代日本国家の建設、近代日本文化興隆のために泣きながらエリスと別れ、公の職場に戻っていくという苦悩、悔恨、そして矛盾が描かれているからである。

又、もう1つの理由には、明治20年代までにはこのような内容の小説が日本にはなかった、ということが挙げられる。

だからこそ、『舞姫』が、近代日本文学の最初の記念すべき作品だといわれるのだろう。

②実在したエリス

『舞姫』のヒロイン、エリスのモデルらしきドイツ人女性が、鷗外を慕って現実に日本に来ている。

又、小堀杏奴（鷗外の子）著『朽葉色のショール』についての解説文に、こんな興味深い文章があった。

彼女（杏奴）が9つごろの時、家の近くの雑貨店の川崎屋につめてゐた少年店員が、「エリスの面ざしにそっくりそのままだ」と妻志げに鷗外は語った、といふのである。杏奴はその「面ざし」を久しく念頭に置いてゐたが、最近になって、鷗外の母の「正面向きの写真の顔に影像がびつたり重なった」ことを発見した。「父はドイツで意識せずその母の面ざしを求めていたのだ」と。恋人を追ひ、妻を求める場合、男性がその母の「面ざし」をそこに見ようとするのは、フロイト的精神分析を持ち出すまでもなく、現実に人々の経験中に数多くあらはれてゐる。鷗外も例外ではなかった、といふわけである。そして、そのエリスの書簡や手紙を死の直前まで彼は保存してゐたのである。

3. 漱石と鷗外

さて、ここで、鷗外と共に明治の2大文豪と呼ばれた夏目漱石と比較してみようと思う。

①生まれた時

〈鷗外〉

津和野藩主の典医の長男として生まれたため、明治維新の後も封建的な出世主義に凝り固まった森家の希望の星として、これに対応しなければならなかった反面、家族の者から頼られ、愛される存在であり、鷗外の弟や妹たち、鷗外の子供たちか

らは、やさしきよき兄、よき父として慕われる存在だった。

博士の父から博士の母を通じて、一種の気位の高い、冷眼に世間を視る風と、平素実力を養って置いて、折もあつたら立身出世しようという志とが伝わっていた。

又、文久元年に祖父が亡くなった、その翌年に生まれた鷗外は、祖父の生まれ変わりだといわれて、大切にされた。

〈漱石〉

没落しかけていた江戸町方名主の五男として生まれ、すぐ里子に出され、その後養子に行ったり戻ったり、祝福された出生とはいひ難い。

②官職

〈鷗外〉

文壇活躍時代において、官職（後期の場合は、現役の陸軍軍医としては唯一最高の地位）を保持したままだった。

しかもその上、多くの雑誌に毎月一回以上も短編小説、翻訳を発表した。

〈漱石〉

一切の官職（教職）を辞して朝日新聞社に入った。そして、原則年一回、同新聞紙上に連載小説のかたちで発表し、その声明を高めていった。

③留学

〈鷗外〉

若くして東京大学医学部を卒業して、陸軍の軍医となり、新興の近代国家日本の一翼を担うという自覚を持って行動した。だから、ドイツ語を習練していた彼にとってのドイツ留学は、またとない飛躍のチャンスにはかならなかった。

〈漱石〉

同じ東大といっても文科大学の卒業であり、地方の教師勤めの間、妻子を持つ身となっていた漱石にとっては、鷗外のような独身で新国家建設を担うというはつらつたる意気ごみで、英国へ留学するような状況ではなかった。

④猫の家

今、愛知県犬山市明治村に移築されている「猫の家」。これは、夏目漱石著『吾輩は猫である』の舞台となった家で、作家・漱石の誕生の地となったのである。漱石はここに、明治36年3月～39年12月まで住んだ。

ところで、この「猫の家」には、以前、鷗外も住んでいたのである。明治23年10月～25年1月まで、千染山房と称した。この後、鷗外は、同町（本郷駒込千駄木）21番地に移り、観潮楼と名付けた。現在の、鷗外記念本郷図書館がある場所である。

偶然にも、明治の2大文豪が同じ家に住んだということは、奇遇である。

4. 作品の分類

乃木將軍の殉死をきっかけにして、鷗外は歴史小説を書き始める。（ちなみに漱石は、これをきっかけに『こころ』を書いた）では、分類表を書いてみよう。



▲図1 作品の分類

自己主張：一切の束縛、制約、伝統、因襲、秩序、隷属、諦念、自己否定をうけつけまいとする自己肯定、素朴な意味での個人主義。

自己没却：運命への甘受、肯定という人生態度。自己否定、秩序への完全な服従、権威に対する全幅の肯定、ある意味での「運命への愛」。

IV 結論

鷗外の文体は、ほぼ同時代を生きた漱石の通俗小説に比べて、はるかに難解である。その文体からは、彼の書く文章の内容、ひいては彼のいた知識階級というのがうかがわれる。鷗外は又、小説家、軍医として活躍したばかりでなく、翻訳家、評論家、劇作家としても活躍したということで、今後まだまだ多くの研究がなされるだろう。

V 総括

私は、『舞姫』の文語体が読みづらかったので、カセットテープで朗読を聴いた。すると——その流暢な文語体はすぐ耳に馴染んで、うっとりさせられた。改めて、鷗外の文章表現の美しさ、さらに文語体というものの美しさを感じた。

良さの分かりかけてきた鷗外の文章について、更に研究を続けようと思う。

VI 参考文献

- ・森鷗外 『雁』 1948年 新潮文庫
- ・森鷗外 『阿部一族・舞姫』 1968年 新潮文庫
- ・森鷗外 『山椒太夫・高瀬舟』 1968年 新潮文庫

- ・竹盛天雄、唐木順三、成瀬正勝ほか『文芸読本 森鷗外』 1976年 河出書房新社
- ・新潮社編『新潮日本文学アルバム1 森鷗外』 1985年 新潮社
- ・吉野俊彦／江藤淳『森鷗外／夏目漱石を語る』 1991年 日本放送出版協会（NHK）
- ・朗読：高橋昌也『新潮カセットブック 森鷗外（舞姫）』 1989年 新潮社

※年は全て、初版のときのもの。